

問1 どの政党のどの政策をくりに抜き取られている。

問2 (ウ)

問3 対立を避け、政治的に中立であろうとする態度それ自体が、政治的中立という巧みな謳い文句のもとで展開される政治的な党派間の権力闘争に巻き込まれ、一方に利用されるなど否応なしに政治的な意味を持つてしまうから。

問4 対立し合う多様な価値のいずれにも関与しないような中立はありえない以上、事実と価値とを峻別しながら、政治的な党派性をも排除することなく、それらの対立する価値を突き合わせて検討するなかで、自分に対して自分の価値を自覚化しようとする習慣的な実践を通してはじめて良心の自由や寛容の観念が成立するという考え。

問5 自らの価値観が近い他者とも異なることを認めながら、多様な意見と公平に向き合いつつ議論に参加し、態度決定する実践を重ねなければ、討論する政治文化も育たず、政治に翻弄され排他的で抑圧的な社会に加担することになりかねないから。

問6 移民の受け入れをめぐって、国内の同質的な秩序を優先して受け入れに反対する政治的立場と、人権と多様性を重んじて受け入れにある程度寛容な政治的立場が存在するように、対立する価値を軸にして友と敵に分かたれたそれぞれの集団に共有されている政治的な傾向のこと。

問1 美学とは、観念的な美と具体的な美の間、あるいは芸術をめぐる分析的な考察と特殊な現実との間をきりもなく往還するなかで思索を深めていく営みであるということ。

問2 美学は、美を対象とする学問であるにもかかわらず、美は一回限りの批判の対象であって、客観的な証明根拠を必要とする学問の対象にはなりえないため、美学という学問それ自体の存在が疑問に付されてしまっていること。

問3 美学が対象とする美は、定義が困難な説明しがたいものであり、その美を学問的に把握しようとする美学という営みは、常に不信感につきまとわれているということ。

問4 説明しがたい美を学問的に捉えようとする混乱を抱えた美学への疑念に抗するべく、美学は学問領域ではなく、「芸術」を見出すために要請された体制の名称であると捉え返すことで、政治の根底に通じる感性的なものをも再評価し、美学の潜在的な力を最大限に引き出そうとする戦略。

問5 美学が「美」「芸術」「感性」という次元を異にする対象領域を持ち、「理念的な美」と「現実的な作品」にまたがる営みである以上、美学は思想と実践を混同した不純な混乱状態にあるという批判は必然的であるということ。

問6 美学が「美」「芸術」「感性」という異なった対象が入り混じった領域であることを受け入れ、それらを含めぐる錯綜した議論にこそ、政治の核心にある感性的なものを再発見させる美学の潜在的な力が宿っていると極力評価すること。

三

問1 ① 何とも言いようがないほど美しく整えて

② 入念に言いなされたところ

問2 X 完了の助動詞「り」の已然形

Y 完了の助動詞「ぬ」の命令形

問3 頼義は、九郎の着ている鎧が、手放すようにと指示した先日の鎧のままであると指摘し、九郎は、頼義の言葉に従って先日の鎧ではない別の鎧を着ていると答えた。

問4 若い者が、九郎のような贅沢で美しい出で立ちをすばらしいと思い、うらやんでまねをすると、家計が逼迫して従者を養えずに戦場で敵に簡単に滅ぼされてしまい、その結果、国が衰退しかねないので、見栄えのしない出で立ちこそがすばらしいと考えた。

問5 ア 見た目の派手さではなく、材質や性質がよく、実利を伴うものを選ぶという点。

イ 武器や馬を派手で目立つようにすると、戦場でまず敵に目をつけられて狙われ、思いも寄らず命を失うことになりかねないから。

四

問1 どもぼうが、大型の箱を開こうとしたけれども、鍵がかかっていたので、斧で蓋を壊すと、箱の中に人がいたから、驚いて走って逃げ去った。

問2 繪賣の某は箱の蓋を壊す音に驚き目覚めると、炎と煙に包まれ人々の泣き叫ぶ大声が聞こえたので、死んで地獄に来たと思ったから。

問3 傍に老叟の亦(た)火を避くる者有り。

問4 因りて語るに夜来(の)大焼(の)事を以てす。
大いに焼くる事

問5 (エ)

問6 a すでに b また c すなはち d ますます